

カナダの芸術とナショナリズム

ジョージ・ウヅドコツク

(文芸評論家)

カナダ芸術をナシヨナリスティックな観点から評価する批評家は、われわれがわが国の作家や画家、演奏家あるいは指揮者の中のナシヨナルな自覚の進展を考へる時に感じる現実とは、全くかけ離れた幻想を論じているにすぎない。自己認識は個人意識から出発して、個の連続体すなわち国(ネーション)を包含するに至る。国とは、国土と国民を含み、過去と現在、現実と理想を含んでいるが、しかしそれらはナシヨナリストが政治的という抽象的なものではなくて、人々が感情をこめて感じている實在要素なのだ。

だからカナダの芸術家たちが、ナシヨナル・アイデンティティ(国民的自覚)に強くこだわらざるを得なかったといつても、それは彼らがカナダ文化史の重要時期に外の世界に対して背を向けたといふことでは決してない。全く反対に、カナダ芸術に国民的自覚が沸き起こるとき、それはその時点で世界的に重要な運動を自己の体内に吸収し、それらの運動のもたらした洞察と方法(もっと狭義に限定したければコスモポリタンな洞察と方法と言つてもよい)をカナダに応用することによつて、常に自らの原動力を培つてきたのである。

このように外国からの借用物が、それまでのわれわれには気づかなかつたカナダの姿を、われわれの眼前に示してくれることがしばしばあつた。われわれは、いわば輸入めがねによつて、周囲の物がよく見えるようになったともいえる。カナダの国民的自覚の高揚は、外からの光に負うところが多いのである。

比較的最近では、「七人グループ」がわれわれの心にしっかりとカナダのイメージを植えつけた。その印象があまりに強烈だったので、たとえばわれわれがオンタリオ州北部を訪れると、そこにワイルドのあの自然模写の作品を見つけたりするほどだ。その七人グループに代表される現代の画家達でさえも、カナダの風景を描くのに、モリスやギャニオン、スゾルコテが後期印象派(とくにピサロ)から学んだものを応用すると同時に、アール・ヌーボールのくねくねした曲線や強烈な色彩の影響(七人グループの場合)を受けているのである。

七人グループ以後の数十年間は、カナダの芸術にとって画期的な国民意識高揚期となつた。ちやうどイギリスのエリザベス朝時代、あるいはアメリカのウィリアム・ジェームズ時代と同じである。カ

ナダはカナダなりに、独自の道を通つて、他のいずれの国とも違ふ国(ネーション)になつたのだ。政治家が古くさい十九世紀的な民族国家にまとめ上げようとして失敗した地方社会が、連邦という形で寄り集まつた独自の国にである。ノースロップ・フライがいみじくも呼んだ開拓時代の「要塞」社会は、すでに歴史の中に消滅し、われわれは漸くこの風変わりな土地を理解し、愛するようになった。

芸術家たちの個々の動きは、たしかに国の文化の豊かな発展につながる。だがそれは政治的なナシヨナリズムとは一致しない。だからこそ逆に、ナシヨナリズムというものがカナダ人のもつ真の天才からいかにかけ離れたものになっているかがわかるのである。カナダ人のもつ天才とは、カナダの歴史における二つの基本的事実にもとづいている。すなわちカナダが多種類の伝統をもつ国であり、かつまた移民とその子孫の国であるという動かしがたい事実の上に立つて発揮されてきたものである。単一のカナダ国家というものは存在しない。

カナダの最も中央集権的政治家でさえ、われわれが名称だけでなく、精神的にも現実的にも連邦(連合体)であることを認めざるを得なかつた。カナダの芸術家は、喜んで外の世界を探検してきた。また利益の源泉としての外界が提供するものを熱心に受け入れてきた。そのことに彼らは、ナシヨナルではあるかもしれないが、ナシヨナリズムとは程遠い天才を発揮してきた。

だがわれわれは、次のようなナシヨナリズムの特性を見出すわけにはいかない。すなわちナシヨナリズムのもつ排他性と権力構造への妄執、地方的なもの、個的なものを犠牲にした上での全体の主張、集団の中へ個人を埋没させる傾向がそれだ。あらゆる国家の政府は、それが唱へるナシヨナリズムがたとえどんなに穏健で非好戦的であろうとも、これらの特徴をある程度はもっている。もちろん、それは上述したような、カナダ人のもつ天才とは正反対のものだ。現在政府がとっている一時的な党派志向がどうあれ、カナダ政府もこの一般原理の例外ではない。

最近広がりつつある文化官僚制は、カナダにとって大切な外国との連続性存在にマイナスの作用を及ぼしている。カナダ文化の形成期には、他国の場合と同様に、芸術家や芸術愛好者が外国文化との永続的で実りある接触を通して認識を培い、美的表現方式を広げてきたのであるから、文化にとってこの外界との連続性が、いかに大切かは明らかであろう。ここ数年の間にカナダ社会が不健全な内向性へ傾斜しつつある理由の一つに、このような官僚制の存在や、芸術家を判断するに創造力よりも出身国をもつてするようなナシヨナリスティックな傾向がないとすれば、まことに幸いである。

(artscanada, 一九七九年十二月/一九八〇年一月号掲載の記事より抜すい)